

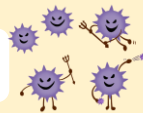
子宮けいがんの予防について ～HPVワクチンについて知ってください～

HPVワクチンは、**小学校6年から高校1年相当の女性**を対象とした定期予防接種です。現在、子宮けいがんの原因の**80～90%**を占めるHPVの感染を予防できる**9価HPVワクチン**が、公費（自己負担なし）で接種できます。

子宮けいがんを予防するために、下記についてご理解の上、是非HPVワクチンの接種についてご検討ください。



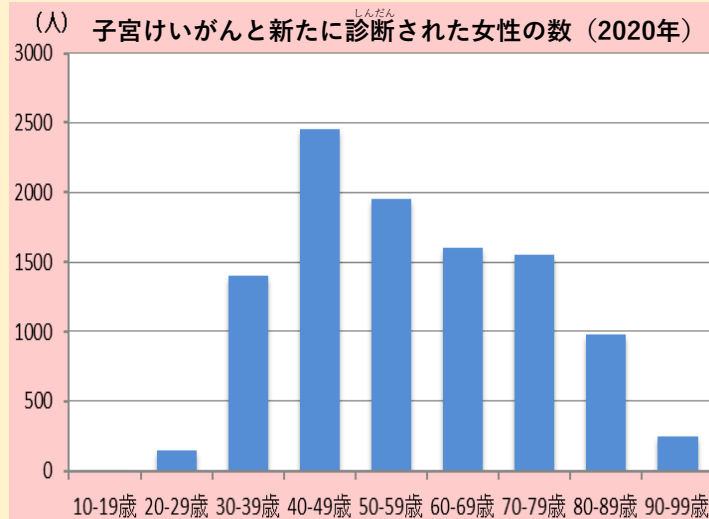
子宮けいがんとは？



子宮けいがんは、子宮のけい部という子宮の出口に近い部分にできるがんで、HPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が原因と考えられています。

日本では**毎年、約1万人の女性**が子宮けいがんになり、**毎年、約3,000人の女性**が亡くなっています。

25～40歳の女性のがんによる**死亡の第2位**は、**子宮けいがん**によるものです。HPVは一度でも性的接触の経験があれば、だれでも感染する可能性があります。



子宮けいがんで苦しまないためにできることは、
HPVワクチンの接種と**子宮けいがん検診の受診**の2つです。
(HPVの感染を予防) (がんを早く見つけて治療)

HPVワクチンの効果

- ・ HPVの中には子宮けいがんを起こしやすい種類のものがあります。HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。
- ・ 9価ワクチンは、子宮けいがんの原因の**80～90%**を防ぎます。
- ・ がんになる手前の状態が減るとともに、がんそのものを予防する効果があることも分かってきています。

HPVワクチンのリスク

- ・ 接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。
- ・ ワクチンの接種を受けた後に、まれにですが重い症状が起こることがあります。ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、接種後に重篤な症状として報告があったのは、**ワクチンを受けた1万人あたり約2人です。**

HPVワクチンを受けていても2年に1度は検診を受けることが大切です。

接種スケジュール

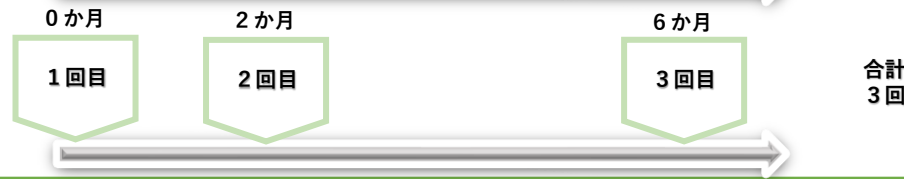
HPVワクチンは、接種を開始する年齢によって、接種の回数や間隔が異なります。

9価ワクチン

1回目の接種を
15歳になるまでに受ける場合



1回目の接種を
15歳になってから受ける場合



学齢期の定期接種 (定期接種スケジュール)

9歳 10歳 11歳 12歳 13歳 14歳 15歳 16歳 17歳 18歳

日本脳炎2期

9歳以上～13歳未満

二種混合2期 (DT)

11歳～13歳の
誕生日前日まで

子宮けいがん (HPV)

小学校6年～高校1年相当の女性

早く接種することで、子宮けいがんの原因となるHPVの感染を予防できます。定期接種終了後に実費負担する場合、約4～10万円が必要になります。

■小学校6年生以上であれば、上記のワクチンを同時接種することも可能です。
詳しくは、かかりつけ医にご相談ください。

HPVワクチンに関する相談先一覧

一般的な相談窓口 (医療、健康被害救済制度等に関するご相談)	電話番号
福岡県保健医療介護部がん感染症疾病対策課	092-643-3596
※下記市にお住まいの方の相談窓口	
北九州市保健福祉局健康医療部健康危機管理課	093-582-2090
福岡市保健医療局健康危機管理部健康危機管理課	092-711-4270
久留米市健康福祉部保健所保健予防課	0942-30-9730
予防接種の実施に関する相談窓口 →お住まいの市区町村の予防接種担当部門	
接種後に、気になる症状が出たとき →まずは、接種を受けた医師・かかりつけの医師にご相談ください	

引用：厚生労働省 HPVワクチンに関するリーフレット

HPVワクチンに関する詳細については、
右の二次元コードから厚生労働省ホームページをご覧ください。



福岡県医師会・福岡県産婦人科医会・福岡県小児科医会